

第14回世界湖沼会議
2011年10月31日～11月4日
アメリカ合衆国テキサス州オースティン市

～ 湖沼、河川、地下水、海岸域の「つながり」を考える ～

オースティン宣言

水は地球上のすべての生命体に共通に与えられたものであり、地球上の貴重な淡水資源の量は有限である。長い年月の間に、我々が利用する水の量そのものが変化し、人口増加、都市化、工業化、食料生産などに対応するための水利用の仕方も多様化した。この結果、世界の多くの場所で水システムは改変され、水資源の過度の利用や劣化が進んでいる。さらに最近では、地球規模で発生している気候変動やそれに伴う異常気象の影響（干ばつ、洪水など）によって、水界や陸上の生態系がさらに被害を受けている。このようなストレスによって、生態系が提供してくれる多くの命を支えるサービスが一中には不可逆的な形で失われている。環境破壊という形で現れているこのような損失は、人間の健康問題を引き起こし、食料の安全を脅かし、経済発展の機会を奪っている。今この地球上には、人類の歴史上にはこれまでなかった70億人も人間が命を育んでおり、淡水生態系とそれらが人間に提供してくれる資源やサービスに対する要求は、かつてないほど大きくなっている。

それゆえ、2011年10月31日～11月4日にアメリカ合衆国テキサス州オースティン市にて開催された第14回世界湖沼会議の出席者は、以下の認識を共有する。

水は、すべての生命にとって根源的なものであり、その利用に当たっては、それが有限であり、繊細、かつ代替できないものであることを認識する。

社会・経済的発展の負の影響による不可逆的な変化の可能性など、水生生態系のあらゆるレベルで起こっている未曾有の変化と、水生生態系とその流域、資源、そのサービスの持続性について重大な懸念を抱いている。

地球上の（液体状）淡水の大部分が、どの瞬間においても自然湖、人造湖（貯水池）などの湖に存在していること（淡水の90%以上を含むといわれている）、また、これらの湖は人間に対して最も広範な生態系サービスを提供するとともに、他の湖、河川、地下水、海岸域と互いに密接に繋がっていることを自覚する。

流れる水（流水系）と溜まり水（静水系）の間の水文学的なつながりが、すべての淡水資源の有用性と特性に本質的な影響を与えることに注意を向ける。

水資源管理の統合的アプローチが持つ概念を促進する統合的水資源管理（IWRM）のような包括的な価値を認識して、水資源管理の統合的アプローチが水資源の持続的利用を目指した水システム管理の基礎となるガバナンスの要素を充分考慮した上でさらに進められることを望む。

1992年のリオデジャネイロにおける地球サミット以降、いくらかの進展は見られるものの、多くの行政レベルにおいてガバナンス、能力、資金が不十分であるという重大な問題が依然として残されている。

このような認識のもと、我々会議参加者は以下の提言を行う。

行政、NGO、市民社会、産業・農業関係者は、気候変動や干ばつ・洪水などの異常事象が引き起こす影響にも配慮しつつ、湖、河川、地下水、海洋沿岸域等の水システムの持続可能な利用を実現するために、また、人間や生態系の健康を守るため、実践的かつ参加型の流域管理の取り組みに尽力すべきである。

有効な水管理のためには、(財)国際湖沼環境委員会(ILEC)によって普及推進されている統合的湖沼流域管理(ILBM)に例示されているように、流水系と静水系の水文学的つながりを充分考慮することが不可欠である。

水システムによって提供される生態系サービスの保持は、水管理の取り組みにおいて不可欠な要素と見なされるべきであり、中でも特に人間が利用する資源供給サービスと文化的サービスを支える調整的サービスに注意が払われなければならない。

女性や若者を含むあらゆる階層の水利用者と利害関係者に対して、水生生態系システムに彼らが及ぼす影響や、生態系の健全性と持続可能な発展の両方を促進する上で彼らが果たせる役割について教育し、伝えていく努力がなされるべきである。

統合的な水管理の取組は、関係機関の責任統合、政策の方向性、利害関係者の参加、科学のおよび伝統的な知識、技術的可能性、資金的な展望や制約などの流域ガバナンスについて、ゆるやかで、継続的、かつ全体を見通した改善をとおして実現される。

流水・静水を問わず、水システムの管理は、単独の計画やその実施だけでなく、アセスメント、実施、評価、改定などを長期にわたり継続的に進める活動として認識すべきである。

水システムの持続可能な管理のためには、すべてのレベルの行政および利害関係者が、技術的対応能力やガバナンス向上能力のみならず、継続的かつ十分な資金確保が重要であることを認識しなくてはならない。

テキサス州を含む米国南西部で最近起きている未曾有の干ばつもその一例であるが、淡水問題の解決を目指すために、様々な自然条件や社会経済的条件下で起こる水資源の持続性に対する試練に取り組んできた過去の実践事例や教訓を活用し、目標を定めて、水システム間の水文学的つながりやその科学的意味、社会経済とガバナンスとの係わりを適切に考慮した統合的な水管理計画や対策を策定・実践すべきである。

行政、NGO、市民団体は、ILBMの取り組みに示されているように、統合的水管理の原則の普及や科学とガバナンスの要素を結びつけた取り組みを進め、ILBMの取り組みが世界の水議論において主流のテーマとなるように、また Rio+20 において議論・検討すべき課題の一つとなるよう努力する必要がある。

我々は、現在および将来の世代のために、人間の要求を満たすとともに、水生生態系と生態系サービスを維持することを目指し、湖、貯水池、河川、地下水、海岸水域の管理、その環境とガバナンスのつながりを一層発展させることを願ってこれらの提言を行うものである。